

## 【風神録の風祝う】

「ねい、ここが第一の異変が起った世界ね」レイムはあたりを見回す。

あたりはレイム達の足を覆う位の草がそこら中に生い茂っていた。

その草の表面をを柔らかな風がなでている。

「異世界の世界は私たちのと好むのちのちで異なっているんじゃないか？」

話しながら歩くレイムとアキユウ。

すると、一人の人間を発見する。何やら落ち込んでいる様子だ。

相手は古地屋サナエと名乗った。

事情を聞くと蛇と蛙の二人の神様が信仰の違いに関してけんかをしてしまったらしい。

「元の二人に戻ってほしいのですが、私がどちらかに加担すれば拮抗が崩れてしまうので手が出せないでいるのです」とサナエはレイム達に助けを求めた。

「神様ねえ。私、あんまりそういう存在信じてないんだけど。」とレイム。

「私もあまり信仰心というものは持っていないのですが神様はいるんです。」「ご覧になればさっとわかるですよ」とサナエは言った。

サナエとアキユウそしてレイムの三人は守矢神社がある山へと向かった。

ついた先では蛙が一番だの、蛇が一番だの言い合っているような声が聞こえてくる。

「あの方たちが弥栄カナコと森谷スワコです」とサナエから軽く説明を受ける。

「これが神様ね…」神の存在などを信じていないレイムには醜い人間の言い争いしか見えなかった。

そいつらしている内にカナコとスワコはいがみ合いの末お互い逆方向へと行ってしまった。

そして、それぞれを信仰している妖怪たちも後についていった。また、サナエも二人を追いかけていってしまふ。

「ねい」レイムは行動を開始した。

## 【信仰は誰のため】

サナエはいがみ合う二人にとにかく神社へ戻るよう説得した。そして、三人が神社に帰って行くのだ……。

「何これ……！」などとか各々の声をあげてサナエ、カナコ、スワ

コの三人。

レイムはそんな三人の様子を見るなり言った。

「どうかしたの？」レイムの目は冷ややかだ。

「どうしたことだー私の神社がー？」カナコは驚愕の表情を浮かべている。

「違うー私の神社だよー！」カナコの言葉に反論するスワコ。

「これは、どういことですかー？」サナエは怒りの気味にそつ言った。

神社は見事に昔の面影もなかった。そして、いつの間にかあたりの木の葉は赤く色づき、木の実を実らせていた。

「あんた達が不甲斐ないから、この神社は秋姉妹を信仰する神にさせてもらったわ」

レイムの後ろから登場する秋姉妹。横で何かが回っている気がするがそれはあえて気にしない。

「この神社は秋姉妹仕様にさせてもらったよ」

そしてさらに川代ニトリがあらわれる。

「仲直りどころか、神社を乗っ取るなんて許しません！」サナエはレイムに向かって攻撃を開始した。

いがみ合っていたカナコとスワコもサナエの助太刀に入る。

(ニヶナイトをよく知らないので戦闘シーンは割愛させていただきます)

「……」

劣勢に苦しむレイム。

「どうしてこんなことなんですか」とサナエは問いかける。

「神様なんて、信じられてなければ存在しないのと同じなのよ。蛇だの蛙だのいがみ合い続けて、まわりの妖怪に信仰されなくなったらあいつらなんてもう神様なんかじゃない！」

信仰とは誰のため！？ 下々の奴らが信仰するから神は存在するってことができるのよー」レイムは叫ぶ。

その言葉でサナエは悟った。

「わかりました」

サナエは秋姉妹とニトリを倒し終わったばかりのカナコとスワコに向き直る。

「反省してへんさいー！」サナエはレイムと共に二人に攻撃を仕掛けた。

(ニヶナイトをよく知らないので戦闘シーンは割愛させていただきます)。

「本気でどうしてやるの？」とレイムはサナエに問いかけた。

「はい、ぜひお礼がしたいんです。二人は元通りになりました」

二人を倒した後、神社を返してほしいとサナエ達に懇願されたため神社を元に返した。

秋姉妹仕様だった神社は二丁丁の光学迷彩でそう見えるように細工されていたため実際は元の神社と何も変わっていないかった。

協力してもらった彼女たちには悪いが、彼女たちも神社やこの山が元に戻って何よかったですと言ってくかへ行ってしまったのでよかったです。

蛙と蛇の神はこれからは信仰回復に努め、仲良くやっていこうと思った。

最後に、サナエが私たちにいらてくるとに家事がどうのどうのと反対していたがサナエが大丈夫と言っていたので二人でどうにかするだろう。

また、天狗達が

「この度はありがとうございます。もう、あのままでしたらこの山のために戦争を仕掛けるつもりでした。」  
と言いきり、二匹は飛び去っていった。

「一丁丁の世界がこれではこの先どうなるかとやぶら……」「とリンノスケは紙に何かを書き記しながらつぶやいた。

「次、行くわよ」

レイム達は新たな仲間と共に次の世界へと一歩を踏み出した。

「次は花塚の世界か」

次回、花塚の世界↓